

研究発表会実施概要

1 日 時 平成19年6月15日（金） 15時～

2 場 所 関西大学100周年記念会館 第2会議室

3 研究発表（15:00～16:30）

（1）坂口順也 大学院会計研究科准教授

発表テーマ「企業間マネジメントのための管理会計

－効果的な企業間コラボレーションのために－

（2）橋寺知子 環境都市工学部准教授

発表テーマ「近代建築の保存と再生

大阪府近代遺産（建造物等）総合調査を通して」

（3）吹田 浩 文学部教授

発表テーマ「古代エジプトの壁画を剥ぎ取りで修復する

－サッカラ・ギザ地域での日本と世界の技術－

4 大学側出席者

大津留智恵子学長補佐

伊藤淳志環境都市工学部准教授

アフメド・シュエイブ氏（エジプト国カイロ大学考古学部保存修復学科助教授）

アーデル・アカリシュ氏（エジプト国ナショナル・リサーチ・センター地球科学部門助教授）

ロベルト・ロガル氏（ポーランド国ニコラウス・コペルニクス大学美術学部研究員）

他

以 上

企業間マネジメントのための管理会計

—効果的な企業間コラボレーションのために—

大学院会計研究科准教授 坂口順也

【概要】

製造企業を想像してほしい。今日の製造企業のうち、原材料から最終顧客である消費者に提供するまでを一つの企業で担当していることはまれであることが分かるだろう。多くの製品は、複数の製造企業からなる一連のプロセス（部品製造企業、完成品製造企業、販売企業など）を経て最終顧客に提供されている。それゆえ、現代の企業では、一つの企業のみが優れた能力（高い品質、優れた機能、低い原価）を持つだけでは不十分であり、複数の他の製造企業とともに協働して能力を発揮することが、今日の熾烈な経営環境の下で要求されているといえる。

こうしたことは1990年代以降、経営学の領域において強く主張されてきたし、また、優れた企業間でのコラボレーションの事例として日本の製造企業（とくに自動車企業）が数多く紹介されてきた。しかし、近年における日本の製造企業での伝統的な企業間関係の見直しや、その後続くリコール問題を考慮すると、「優れている」と評価されてきた日本の製造企業における企業間コラボレーションについても、再度検討する必要があるといえるだろう。本プレゼンテーションでは、効果的な企業間コラボレーションについて今後検討する上での一つの有用なアプローチとして、管理会計があることを紹介したい。

一般に「会計」と聞くと財務諸表を作成するために必要となる財務会計や、課税所得の算定のために必要な税務会計、さらに、それらの基礎となる簿記を思い浮かべるかもしれない。しかし、会計には、企業や企業間のマネジメントのツール（あるいは思考方法）としての側面もある。こうした管理会計の重要性や可能性の一端を示し興味を持ってもらうことが、本プレゼンテーションの隠れた目的でもある。

【プロフィール】

1971年大阪府生まれ。関西大学大学院会計研究科准教授。JR貨物原価管理検討委員会委員。NTTグループ財務戦略研究会委員。専門は管理会計（とくに企業間での管理会計問題に焦点を当てた組織間管理会計）。立命館大学経営学部卒業、神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程修了。博士（経営学）。2006年4月以降現職。主著は「組織間管理会計の研究課題とその意義：組織間関係における財務情報と非財務情報の併用」『原価計算研究』第27巻第2号（共著、査読付）、「日本企業におけるバイヤー・サプライヤー間の協働」『原価計算研究』第28巻第2号（単著：査読付）、「組織間マネジメントコントロールにおける情報共有の意義」『広島大学マネジメント研究』第4号（共著：査読付）、「設備投資マネジメント・プロセスとその影響要因」『原価計算研究』第29巻第2号（共著：査読付）など。

近代建築の保存と再生

大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査を通して

環境都市工学部准教授 橋寺知子

【概要】

近代建築とは、幕末・明治期から第二次世界大戦終了頃までに建てられた建造物を指す。近年、「近代化遺産」という語がよく用いられるが、これは単に建物としてだけでなく、日本の近代化に大きな役割を果たした橋梁や鉄道等の土木構築物、発電所や水道施設、工場等の産業関連施設も含めて、より広い枠組みで文化遺産を捉えようとするものである。大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査は、大阪府下に現存する近代化遺産を把握しようとするもので、平成 16 年度から 3 年をかけて実施された。

この調査の一つの意義は、対象となる物件のリストの作成にある。リストアップする事で全体の把握ができ、そこから大阪という地域の特徴が浮かび上がり、新たな文化財の発掘も行える。しかし、出来上がったリストを見ると、設計者や施工者、竣工年等の基本的なデータが不詳のものも少なくない。近代化遺産では、以前は建築史上ではほとんど取り上げられなかった工場や倉庫等の実用建築が主役と言える。これらは「文化財」とは無縁と思われた存在である。築 50～80 年ほどであるにもかかわらず、図面等の基本的な資料が散逸したのも少なくない。調査を契機として、現存する資料をできる限り収集し、実測や写真撮影で現在の姿を記録することも重要だ。

近代化遺産として重要で、詳細調査を行いたいと考えていた物件でも、3 年の調査期間中に解体されてしまったものがある。景気が好転し、大阪市内では大阪中央郵便局、朝日ビル、新歌舞伎座の移転など、建替を伴う開発計画が次々と提案されている。未知なものが誘発する楽しさと、見慣れた風景がもたらす親しみが共存するような都市再生が望まれる。我々の約 100 年の時代の軌跡を示す近代化遺産の積極的活用によって、深みのある街の風景が生まれるだろう。

【プロフィール】

1965 年兵庫県生まれ。1988 年関西大学工学部建築学科卒業、1993 年関西大学工学研究科博士課程後期課程修了、博士（工学）。同年関西大学工学部建築学科に助手として着任、現在に至る。専門は近代建築史。2004 年関西大学在外研究員としてヘルシンキに滞在し、戦後建築の保存・再生の状況を調査研究する。趣味は研究も兼ねての旅行。

古代エジプトの壁画を剥ぎ取りで修復する ーサッカラ・ギザ地域での日本と世界の技術ー

文学部教授 吹田浩

【概要】

2003年から調査を開始し、2005年から修復事業を開始した。今年は修復事業の3年目に入り、来年での事業の完了を目指している。今回、事業の全体を見渡し、今後の計画を立てるために、国際シンポジウムを開催する。

事業の対象は、サッカラの王女の地下埋葬室にある壁画である。これは、紀元前2360年に遡り、ギザ-サッカラのピラミッド地帯の世界遺産の一角を占める一級の文化財である。地下の岩盤にプラスターを塗って、美しい絵が描かれているが、剥落の危機にあった。

この地域の修復はなされたことがなく、我々がエジプト、ポーランド、日本の技術を組み合わせることで世界ではじめて行いつつある。布海苔とレーヨン紙を使った日本の表打ちの技術は評価されている。

剥ぎ取りによる壁画の救出の目処がたった今、次に文化財の活用方法を検討すべき時期にきている。この地域の地下は、マール（粘土や泥を含む石灰質の地層）からなり、大変にもろい。この地下埋葬室を公開するには、日本の地盤工学の技術も有効であろう。

【プロフィール】

1985年本学西洋史を卒業、87年本学大学院博士課程前期課程を修了。90年度奈良国立高専非常勤講師、翌年、本学非常勤講師などを経て92年に本学専任講師として母校に着任し、95年に助教授、2002年から教授に就任した。本学在学中から加藤一朗名誉教授に師事してエジプト象形文字を習得し、古代エジプトの宗教研究に取り組み修士論文を英文で仕上げた。その後も、難解なヒエログリフ資料を試訳してそれにもとづいて論を立てるといったヨーロッパ流の本格的な研究姿勢を示している。現在は、古代エジプトの文化史の研究に加え、エジプトの遺跡の保存修復活動にも関心をもち、カイロ大学考古学部の教員と共同で研究を進めている。03年からは、サッカラにあるイドゥートという名の女性のマスタバ墓の地下埋葬室壁画の調査を始め、この地域の壁画の修復技術を世界で初めて開発しようとしている。